

学びの楽しさを、指導しましょう。

石井康雄（前船橋市立金杉台小学校 校長）

Q

2年生「1000をこえる数」では、どのような学びの楽しさを指導したらよいのでしょうか？

A

数の指導では、数が大きくなればなるほど、具体物や半具体物による指導が難しくなってきます。導入の際、子供たち一人一人に半具体物を用意できればよいのですが、難しいときには、P86の挿絵を使用しましょう。この挿絵をデジタル教科書から児童一人一人のタブレットに転送することで、具体物として取り扱います。

この具体物を使って、初めは数えさせることを指導します。この頃の子供たちは日常生活の中で、「いち、じゅう、ひゃく、せん、まん」と、唱えることができるようになっていきますので、これを既知の経験として扱ってから活動させましょう。そうすれば、100のまとまりが何個できて何になったかという、理由もつけて、答えを求めたときの見方・考え方で発表することができます。

数の唱え方やかき方は、2年生上P74からの指導と同じです。したがって、その時と同じように指導していけば、深い学びになります。毎時間の指導に当たっては、常に教科書の内容を比較しましょう。計算指導と同じで、例えば、2けたのたし算から3けたのたし算に移行したときと同じような見方・考え方の指導です。そして、「桁が大きくなったら、どんなところが違うのか？」「違うところをどのように見れば、同じとみられるか？」という、異同弁別を指導することです。数が大きくなることで、出てくる数字の数が増えますが、増えたことで、たくさんよんだり、たくさんかいたり、たくさん調べたりする活動が楽しいと思えるように工夫しましょう。「100をこえる数」の学習が十分に身に付いていない子には、配慮として、この学習で両方を比べながら学ばせれば、「1000をこえる数」の学習も身に付くと思いますので、「〇〇は、すでに100をこえる数で教えたでしょう。」ではなく、「〇〇は、100をこえる数で教えたけれど、もう一回教えるので、理解しましょう。」と、温かく指導することで、その子の学力を向上させましょう。

Q

2年生「はこの形」では、どのような学びの楽しさを指導したらいいのでしょうか？

A

導入部分で楽しさに触れさせます。P95を見せて、「教科書と同じような箱を家で探して来てください。」と、明確に指示しましょう。なぜなら、単に「いろいろな箱を探しましょう。」だけでは、円柱や六角柱など、本単元の学習内容にふさわしくない箱を見つけて来る子がいると思われるからです。本単元は、1年生「いろいろなかたち」が既習指導ですから、しっかり取り組んだ子ほど、四角い形や丸い形、三角な形といった、いろいろな箱を見つけるでしょう。「教科書と同じような」と明確に指示することで、構成要素に目を向けさせることができます。

P96では、箱の面に1枚ずつ紙を貼って、きれいな箱をつくりませんが、なぜこの作業をするのか、という目的をはっきりさせましょう。教師が「箱の形はどんな形で出来ていますか」と発問すれば、子供は正方形や長方形と答えるでしょう。そこで、「面」という用語を教え、正方形や長方形の数を考えさせます。この見方・考え方が重要です。ここまで考えさせてから作業をさせます。目的がはっきりしているので、楽しく学習できると思います。箱の面を紙に写し取らせる際は、写し取った面に印(☒)を入れさせましょう。すべて写し取ると、面は6つで、同じ形(大きさ)が2つずつあることがわかります。子供たちが気付いたらその理由を考えさせましょう。

P98は構成要素の学習です。辺や頂点の数を調べる際にも、(☒)のような印が付けられる工夫をしてください。箱の形を板書する際には、まず、図①のように、同じ長方形をずらしてかき、つぎに、図②の細い線のような4本の辺を加えます。このようにすると、子供たちもノートに綺麗にかくことができます。なお、見取り図の正確なかき方は4年生で指導しますので、ここでは深く触れる必要はありません。



P99からの組立作業にはやや困難さが伴います。工作用紙を使った箱作りでは、面と面をテープで仮留めしながら作らせるとよいでしょう。失敗を恐れない、失敗したらその原因を自分で考えさせる、教師はそのための支援をする、という立場で指導していきましょう。また、ひごを使った箱作りでは、ひごとねんど玉がいくつになるかを考えさせます。ひごは構成要素の辺、ねんど玉は頂点になることをはっきりさせます。そして、まず基準である底面の長方形をつくらせましょう。この、底面の長方形をつくる一斉指導が重要です。その後は、基準が決まれば、あとは自力でというように、制作にはあまり時間を要しないでしょう。そうすれば、ふりかえろうにおけるれんさんのような気付きが出てくると思います。

